／編／集／余／滴

「医療」編集から見た「医療」の可能性

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター
白 阪 琢 磨

「医療」の編集会議は毎月東京で開催され，投稿論文の査読結果の審査，投稿状況の把握，特集，図説の企画の検討などが行われる．その役割は会員の皆様に読み応えがあり，質の高い紙面を提供する事と考える．会議には編集委員（編集幹事も出席され）の他，政策医療振興財団，医療編集室の方も参加し編集を補佐している．小生は遠方でもあり出席率は高くはないが，これまで編集会議に参加してきた感想を述べ，本稿執筆の役目を果たしたい．

本誌7月号に鈴木紘一委員長自らが執筆された余滴をご覧になるとおわかりの様に，独法化前後には「医療」の存続さへ必ずしも明らかではなかった中で，委員長のリーダーシップの下，編集委員会は特集，論説，総説，原著，総合医学会報告，図説等々の編集を粛々と行ってきた．国立病院の独立行政法人化が実施され，多くの変革が進む中で，「医療」は今後のあり方を巡って重大な局面に直面している．しかし，現在における本誌の役割，意義を改めて問うても，その回答は容易ではない．「医療」が国立医療学会の学会誌であるとすれば，まず国立医療学会に学会運営の基本方針があり，その方針に沿って会誌の編集作業を進めるのが通常かもしれない．

さて，小生が「医療」を初めて手にしたのは，昭和63年から一年間，国立療養所近畿中央病院に勤務した時であったと思う．その当時は本誌を内科学会などの学会誌とは随分と趣の異なる雑誌であると思った記憶がある．平成9年，国立病院に再び勤務することとなり，本誌を見る機会があったが，編集委員になる迄は読んだ事もあまり無かった．国立病院，国立療養所総合医学会には何度か参加したが，総合医学会と「医療」との関係についても，よく認識していなかった．編集会議に参加するようになって初めて，「医療」とはいったい何であるか，編集のポリシーが何かなどが見えてきた．言うまでもなく，本誌は旧国立病院および国立療養所に勤務する医師など職員が共通して読める会誌であり，内容としても国立病院機構が担っている政策医療，例えば，神経難病，呼吸器疾患，重心，災害医療などが掲載されてきた．それらは，国立病院機構の病院が国内でも中心的に取り組んでいる疾患であり，政策医療を取り上げている事は本誌の特色の一つと言える．また近年の特集は，専門外の医師にとっても興味深い内容が多かった．

前述の独法化の波は「医療」にも押し寄せて来ている．本年の6月号，7月号の余滴に「医療」の存続を含めた編集会議での議論の一端を窺い知ることができる．知り合いの医師の中には，廃刊やむなしの意見もある．独法化後の「医療」は，会員，読者の支持がこれまで以上に必要となった．会員，読者に読み応えのある会誌とは？期待される役割は何だろうか？例えば，内科医師の場合，New England Journal of Medicine, Lancet, Annals of Internal Medicine に目を通し，感染症なら Journal of Infectious Diseases，あるいは国内の学会誌などに目を通してさえいれば，質の高い医療ができるであろうか？現実には，研修医やレジデントだけでなくスタッフ医師も，診療のポイントや，疾患，制度などの解説的医学関係雑誌や商業誌を読み活用しているのではないだろうか．基礎あるいは臨床の研究者の場合，各人の業績は執筆論文が掲載された雑誌のインパクト係数なるもので評価される．しかし，優れた研究者が優れた臨床家とは限らず，国立病院機構の医療レベルはインパクト係数だけでは評価できないと考える．総花的と評される「医療」であるが，医療機関の全国最大のチェーンとも言える国立病院機構が取り組む医療は，政策医療を中心に多彩であり，まさに総花的である．「医療」の読者に読み応えのある，診療，日常業務に役立つ紙面の構築を計るのも一つの方向だと考える．医学的質の高い論文だけではなく，国立病院機構に勤務する医療従事者が日常診療の積み重ねの中で見いだした新しい発見を Evidence に基づいて論文にまとめ，種々の分野から投稿して頂ければ，新しい発見を共有する事が出来，国立病院機構全体のレベルアップにも繋がると考える．国立病院機構の重要な役割に初期後期研修医の教育研修も含まれる．教育研修に役立つ紙面も良いかも知れない．変革期の今，読者が「医療」に興味を持ち，希望を多く寄せて頂ける事で，「医療」が新生する事を強く願う．